
書 評 ・ 紹 介

人口学研究会(編)

『現代人口辞典』

原書房, 2010年1月, 391pp.

現代においては、TFRや少子化のように、はっきりとした定義がされないか、あるいは誤解されたまま、マスメディアで濫用される言葉が多い。この風潮を正すためには、人口学用語の正確な理解を広めることが肝要だが、日本語で書かれた用語辞典としては、国際人口学会の編纂になる『人口学用語辞典』(日本語版は厚生統計協会から1994年刊)がほぼ唯一の既刊書であったうえ、同書は記述が見出し語の説明という形ではなく、人口学についての箇条書きの記述を系統的に並べた中で専門用語をマークアップし、必要に応じて注釈を加えるという形であったため、記述がコンパクトに過ぎた。本書は、主要な専門用語を見出し語として五十音順に並べたことによって辞典として引きやすくなっており、簡明かつ各用語の意味を理解するのに十分な詳しき説明が付された、新しい『人口学用語辞典』であり、上記の目的で待望の書であったといえる(ただし、メディアにおける用語の正確な使い方や統一を促すためには、「合計出生率」の説明にあるのと同じかそれ以上に、積極的にその点に踏み込んだ記述があっても良かったように思う)。

人口学は非常に広い範囲の学問を基盤にしているゆえ、このような辞典の編纂は困難だが、経済学、社会学、地理学に軸足をもち人口学研究者が数多く参加して活発に活動してきた人口学研究会だからこそ、本書を生み出すことができたと思う。もっとも、生物学関係の研究者がほとんど参加していないためか(遺伝学関連の用語については専門家の協力を得たとのことで、かなりカバーされているとは思いますが)、例えば、イヴ仮説が見出し語になっている一方で、精子数減少説や祖母仮説に触れられていないのは、ややバランスが悪く感じた。

本書は、見出し語から説明を読むだけでなく、索引も探して、別見出しの中で触れられている部分も読むべきである。このことは編著者もわかっているようで、はしがきにも「読者が希望する用語の解説をすぐに見つけられない場合が多いかもしれない」と書かれていた。辞典的用途からいうと、索引だけにあるのではなく、見出し語の説明末尾の参照項目(⇒で示されている)として出てほしかった用語もあったし、見出し語の中に含まれている索引語については、索引にその見出し語のページを挙げてほしかった。例えば、索引で「センサス」を引くと、148r、197rと書かれているが、34rに見出し語として「近代的人口センサス」があるので、34rも入れてほしかった。この語の場合、148rの「人口センサス」の説明からでも34rにはたどり着けず、197rの「全数調査」の説明を読んで初めて「近代的人口センサス」という見出し語があることがわかる。もっとも、これらをすべて読めば「センサス」についての理解が深まるので、1つの見出し語だけを見てわかった気にならず、しつこく読めば、得られる情報は大きい。

なお、新しい用語については、説明が不十分な場合もあった。例えば、「限界集落」という用語が「過疎」の説明に出てくるが、定義が示されていないので、誤解を生むかもしれない。しかし、紙幅が限られている以上、こうした制限は仕方ない面もある。

以上挙げたように、いくつか残念な点はあるけれども、本書は他に類をみない、かなり網羅的で新しい人口学用語の辞典である。その意味で、新聞・雑誌・テレビなどマスメディアの記者はもちろんだが、広告業界の人や学校教員など、人口学用語を扱う可能性があるすべての人が、それに関連した用語を使う時には一読してチェックしてほしい基本文献となるものである。さらには、読者や視聴者としてそれらの情報の受け手となる一般市民の側でも、人口学関連の用語の意味がよくわからないときに気楽に紐解くべきリファレンス本として非常に有用である。本書の時宜を得た出版に敬意を表したい。(中澤 港/群馬大学)